

質疑応答

【報告者】

銅金裕司(京都造形芸術大学)

横山千晶(慶應義塾大学)

谷 美奈(帝塚山大学)

【司会】

岩井 洋(帝塚山大学)

岩井

私が質疑応答の司会を務めます。よろしくお願いいたします。では、質問がある方、どうぞ。

質問者1

先生方、刺激的な発表をありがとうございました。三つ質問があります。一つ目は、ワークショップ型の授業の検証の仕方についてです。これは、三人の先生方にご意見を伺えれば幸いです。私もワークショップ型の授業を2000年頃から行っています。ワークショップが終わった直後はどの学生も盛り上がっていて、感想を書かせると「感動した」という内容が大半を占めるのですが、その感動がいわゆる「身体知」としてどの程度身についているのか、疑問に感じています。「ワークショップで得た気づきが現在につながっている」と話す卒業生がいますから、「身体知」として残っている人は確かにいるのですが、全員ではないような気がします。そこで、どのように検証したらよいかをお尋ねしたいのです。

二つ目の質問は、一つ目の質問に関連して、横山先生にお聞きしたいと思います。先ほどの先生の発表の中に、実験授業「新しい文学教育」では、冷静に活動内容を客観化できるように、最後の授業を終えてから2週間後に振り返りを行うというお話がありました。そうすることでどのような効果が見られたかを、もう少し詳しくご教示ください。

三つ目の質問も、横山先生へのものです。実験授業「新しい文学教育」では個人発表とグループ発表を両方行ったとのことですが、その目的はどこにあるのでしょうか。私も、自分の授業で個人、グループそれぞれで発表させています。個人発表に向けてペアワークなどをさせると、他者の意見を積極的に取り入れ、とても力を伸ばす学生が目立ちます。ところが、グループ発表をするにあたって話し合いをさせると、なぜか、積極的に話し合うのは一部の学生だけで、それ以外の学生は蚊帳の外に置かれたようになってしまいます。これを解決するヒントを得られればと思いますので、よろしくお願いします。

岩井

では、まず検証の仕方について、銅金先生からお答え願います。

銅金

マンデープロジェクトでは、1回のワークショップが終わる度に、そこで自分が何を感じたかを学生に書かせています。個人による振り返りは毎回のワークショップにあるわけ

です。さらに、全てのワークショップが終わった後には、学生全員で新聞を作ります。個人による振り返りを積み重ねた末に、集団による振り返りに取り組むということです。新聞は、マンデープロジェクトやワークショップ全体の意義について、ファシリテーターを交えて話し合いながら作ります。でき上がると、「京造ねぶた」と一緒に展示するほか、保護者に送付することもあります。

横山

振り返りは、「身体知」の授業がカリキュラム化されてからはあまり行えていません。時間不足のためです。

「身体知」の授業では、学生同士が非常に密接にかかわり合います。この集団を、知的共同体、授業外でも行動を共にするような集団にいかにつけて上げるのかを、私はいつも考えています。受講生同士の結びつきを強めるための工夫は行っています。たとえば、「身体知」の授業の受講生専用のメーリングリストを作ります。また、発表のときは、卒業生を含む過去の受講生に見に来てくれるように声をかけています。さらに、過去の受講生が飛び入りで発表してもかまわないことにしています。教材は2～3年は同じものを用いますから、過去の受講生でも発表しようと思えばできるわけです。過去の受講生と現在の受講生とが交流するきっかけともなります。同じ理由から、「身体知・映像」では過去の受講生にティーチング・アシスタントとして参加してもらいます。大きな衝突、コンフリクトが生じたときに、学生の目線でうまくアドバイスしてもらえとも期待しています。このように、授業を通してできあがった共同体を活用することを心がけています。

ワークショップでの感動体験が後に専門分野の学習にどうつながるかかどうかは、学生によって異なるでしょう。役立てられる学生もいれば、そうでない学生もいます。それでいいと、私は考えています。学問的に役立てることよりも、共同体として、居場所として役立てたいという思いのほうが、私には強くあります。だからこそ、過去の受講生と現在の受講生との交流を大切にしています。

また、全ての授業が外に開かれていること。通信生が授業を履修できる、聴講生になれることの利点はさまざまあります。若い通学生が82歳の通信生と一緒に学習することはそれだけで共同学習です。実験授業「新しい文学教育」を前身とする「身体知『創造的コミュニケーションと言語力』」は、夏休み中の集中講義であり、通信課程の学生や聴講生も履修できますから、受講生の学年・年齢層が多様です。ここでの交流は、普段、同世代としか交流がない学生にとって、自分とは違う価値観に触れ、衝突する良い機会となるでしょう。

谷

検証と呼べるかどうかはわかりませんが、1年次のパーソナル・ライティングの授業が、上級学年になってからのレポートや論文作成にどのように役立っていると感じるかといった内容のアンケート調査やインタビュー調査を、過去の受講生に対して行っています。

また、検証とは少しずれますが、過去の受講生が作った文集をテキストとして用いています。先輩が自分たちと同じ学年のときに書いたエッセーですから、現在の受講生は親近感を覚えて、どの教材よりも熱心に、集中して読みます。過去の受講生を授業に招くこともあります。文集の編集会議では、かつて自分が意見をどのようにまとめたかなどを具体的に語ってくれるので、現在の受講生はとても参考になるようです。

岩井

三つ目の質問、実験授業「新しい文学教育」で個人発表とグループ発表を両方行ったことの目的については、横山先生、いかがですか。

横山

現在の「身体知『創造的コミュニケーションと言語力』」でも、個人、グループの両方で発表させています。それは、個人による表現だけでなく、他者との協同による表現創作も体験させたいからです。グループ発表では、各自誰のどの案をどのように用いるか、用いたのかをその理由とともに挙げて話し合うように、指導しています。ただ仲が良い者同士が互いの案をつなぎ合わせて発表するのではなく、よく知らない学生の案、表現の仕方もしっかり見て、他者の力を見出してほしい、その後グループ内で話し合っって新たな表現につなげてほしいと考えています。シャイな学生で口数こそ少なくても、口頭以外の発表では輝くものを持っているというように、表現の多様性に気づくきっかけにもなるでしょう。

私の授業でも、グループでの話し合いが、リーダーシップのある学生とそうでない学生に截然と分かれることはあります。ファシリテーターとして教員がグループにどのようにかわるか、学生一人ひとりの個性をいかに引き出すか。これは、簡単に答えの出せない難しい問題だと考えています。

また、必須である個人発表と異なり、グループ発表は任意にしています。そのため、発表するグループがいくつあるかは年度によって大きく異なります。たくさんいる年度もあれば、少ない年度もあります。

岩井

ほかにご質問はございませんか。

質問者2

本日は、興味深いお話をありがとうございました。教えていただきたいことがあり、手を挙げました。

本日の先生方のお話は、学生の感動を呼び起こすための工夫をし、感動をアカデミックな領域にも波及させたいと、大まかに言えばこういう内容だったと理解しております。

私は協同学習について研究しています。協同学習は、対話を通して互いに理解を深めていくという、最初からいわばアカデミックな世界の活動です。一人が自己紹介をすると、それを聞いていた人たちが「わあ、すごい」と拍手するというように、ちょっとした活動でも身体反応はすぐに表れます。先日も、教員の免許更新の三日間の講習会で、こんなことがありました。二日間、4コマずつ同じグループで取り組み、翌日、三日目にはグループを変えることになっていたのですが、二日目の活動が全て終わってから、グループ内で互いにお礼を言うというセッションを設けました。すると、全8グループのうち2グループで、泣き出す先生が続出したのです。これを見ていた他グループでも、もらい泣きをする先生が何人も現れました。いずれも、前日に知り合ったばかり、さまざまな年齢も職歴も違う先生方が混在するグループです。後で振り返りシートを見ると、「なぜ泣いたのかが分からないが、とにかく涙が出て仕方がなかった」というコメントが多かった。また、「これまで友だちにも話したことがないようなことを、グループ内で話した」というコメントもありました。

このように急激な身体的変化が、協同学習のようなアカデミックな活動で生じることがあるのです。これをどのように理解すればよいのか、私はまだはっきりした答えを出せていません。先生方は、どう理解されますか。どなたでも構いません。ご意見をお聞かせください。

銅金

本学のマンデープロジェクトのワークショップでは、学生が他者とのかかわりを通して自分の役割に気づく瞬間があります。自分とはどのような人間かが見えてくると言ってもよいかもしれません。2013年度1年生にも、自分への思いを強く、また新たにしたいといった振り返りが目立ちました。こうしたことと、安永先生が紹介してくださったお話とは共通するものがあると思います。

横山

教員は悩みを持っていく場が少ないし、それでいて学生の前ではロールモデルになる必要があります。これは、とても重く、辛い立場ですから、孤独を感じている先生方は少ないと思います。私だってそれは一緒です。

本学でも、年齢層が高い通信課程の学生も参加してワークショップを行っているとき、ときどき、安永先生が話してくださったようなことが起こります。様々な人生を送ってきた人々だからこそ、他者の痛みや気持ちを、自分のこととして感じるができるのでしょうか。その結果、知り合って短い期間でも、感情が発露し、涙が出るのではないのでしょうか。

遠慮なく泣くことができる環境があるのは素晴らしいことで、学生にも作ってあげたいと、私は思っています。最近はずいぶん少なくなりましたが、以前は「英語ドラマ」の授業で公演を行うと、終了後ほとんどの学生が泣いていました。制作中は極限まで自分を追い詰めているでしょうし、他者と力を合わせて作り上げたという達成感がすごくあるはずですから、泣かずにはいられないのだと思います。ここで泣くのは、ごく自然なことでしょう。

他者が自分の感情を手放しで受け入れてくれていると察することは、非常に重要だと思います。「身体知・映像」の授業では、グループを3回変えます。グループが変わるときは、もとのグループのメンバーに対して一言コメントを書きます。これは、褒め言葉でなくても、後で私たち教員が読んでも胸に響くことがありますから、学生にはなおさらでしょう。

他者が自分にかけてくれた言葉が、新たな自分の一面に気づかせてくれたとき、涙は流れるものだと思います。

谷

まず、泣くことを恥じない雰囲気ができているからではないか、と思います。そうした雰囲気は誰にでも作れるわけではないはずですから、安永先生の個性に負うところも大きいのではないのでしょうか。また、銅金先生と横山先生がおっしゃるように、他者の存在も重要だと思います。知り合って日が浅く、したがってさほど親密ではない間柄であるにもかかわらず、感情を露わにできる。これは奇妙なようですが、むしろ、さほど親密ではない、つまり自分とは異質な存在だという意識が強いからこそ、気を許せることもあるような気がします。知り合ったばかりの人に対するほうが、親友に対するよりも深刻な話がしやすいかったという経験が私にはありますが、これに近いのではないのでしょうか。

私の授業でも、1～2週間前に知り合ったばかりの相手に、聞いていてこちらがハラハ

ラするほど明け透けな話をしたり、始まって間もない授業でも、自分のことを考えたり表現したりするうちに、感極まって泣き出したりする学生もときに見受けられます。ただ、そういう学生はこちらが思うよりも、肯定的な意味において自分をさらけ出している、ということが出来ると思います。おそらく、カタルシスという効果があるのではないかと思います。

岩井

司会者があまりコメントをしてはいけないと思いますが、一言申しあげます。

私の専門は宗教学、人類学、社会学です。銅金先生の発表には、反復が正解につながっていくという話がありましたが、これは、宗教の世界にもそのまま当てはまると思います。反復が快感になってくるのです。自己啓発セミナーなどでは、初対面の人同士が共感し合って涙を流すことが結構あるそうですが、安永先生がしてくださったお話はこれとかなり似た構造にあると思います。つまり、カタルシス、自分の内面性を吐露し、共感を得られたことのうれしさ、快感が大きく作用しているのではないのでしょうか。

また、さほど親密ではない間柄で激しい感情の発露がアカデミックな活動で生じたことを、安永先生は重視していらっしゃいました。ただ、アカデミズムとアートとははっきりとは分けられないと、私は考えています。学問自体がアートの一部であるとも考えられるのではないのでしょうか。

アカデミズムの世界と芸術の世界とは違うと考えられがちですが、そうではないのではないかと。これについて考察することが、本日の大会企画フォーラムの重要なテーマの一つだったと思います。

谷

じつは、今回、私がこのフォーラムの企画コーディネイトを担わせていただいたのは、そういったことをお伝えしたかったからです。アートには科学が、科学にはアートが含まれている、と私は考えています。現在、それがあまりにもかけ離れてしまっているのです。そこに私の問題意識があります。レオナルド・ダヴィンチは、科学者であり芸術家でした。

銅金

造形物、制作物が物理的に存在するということは、感動のメカニズムを考える上で重要だと思います。先ほどご紹介した「京造ねぶた」でも、何もない状態から作り上げたものが物理的に存在する。自分たちで完成させたものがそこにある。これは、かなり深い感動をもたらすはずです。

横山先生が他者に自分をさらけ出すということについてお話ししていただきましたが、芸術作品はまさに自分をさらけ出して作るものです。さらけ出した成果が芸術作品であると言っても良いでしょう。「京造ねぶた」を完成させて感涙にむせぶ学生が多いのもそのためだと、私は考えています。

岩井

少し見方を変えたと、パネリストの三人の先生方が取り組まれていることは、自己の内面を相対化する試みであると言えるのではないのでしょうか。考え、思想、感情といった自分の内面を、あるいは物体として、あるいは文章として、形を与えて現前させる。これは、自分の分身を作っていることに等しいと思います。分身が、カタルシスを生むのではないかと思います。

質問者3

本日は、示唆に富むお話をありがとうございました。

谷先生に三つ、伺いたいことがあります。一つ目は、学生同士で文章を批評し合う活動についてです。私も指導した経験があるのですが、相手を気遣うあまり、はっきりした批評、指摘を控える学生が目立ちました。学生同士が表層的な衝突、コンフリクトを恐れず、相手の文章を良くするために具体的に批評するようになるために、ポイントとなることがあれば教えてください。

二つ目の質問は、一つ目の質問と関連します。1年間ではなく半期だけの授業の場合、授業時数が少なく、コンフリクトの解消にさほど時間をかけられない可能性が高いと思います。そういう場合、谷先生はどのように指導されているのでしょうか。これについては、横山先生にもお答えいただければと思います。

三つ目の質問は、個人的な経験を言語化することに対する学生の抵抗感についてです。悲しさにしてもうれしさにしても、それが深いほど、自分の胸のうちにしまっておきたいと思う学生がいても不思議ではないと思います。それを文章に書き、他者に見せたり他者の前で発表したりするとなれば、なおさら抵抗を感じる学生がいるような気がします。いかがでしょうか。

谷

学生同士で文章を推敲し批評し合う活動、ピアレビューはクラスの様子を見て始めますから、最初には行いません。私の授業は、1年間なら前期、後期4クールずつ、半年間なら4クールで構成されており、1クール、3〜4週間でエッセーを一つ書くのが基本です。ピアレビューを行うのは、私がクラスの様子を見て、学生同士が馴染んできたと判断する頃、半年間の授業では終盤の第3〜第4クルールの時期です。それまでは、基本的には学生のエッセーは私が添削し批評しています。

ピアレビューを行うにあたっては、学生に賛否を尋ねます。全員が賛成しなければ行ないません。たとえば第4クールでしたら、その時点で学生はエッセーを三つは書いています。ピアレビューは、過去に書いたエッセーも対象になりますが、読まれたくない文章は読ませなくて構わないとも伝えます。ただ、ピアレビューや発表を拒む学生は、正直ほとんどいません。統計があるわけではありませんが、感覚としては100人のうち二人ほどの割合でしょうか。

そもそも、第1クルールの最初の授業から、書きたくないことを無理に書く必要はない、書かなくて構わない、基本的に書きたいことを書くようにと繰り返し説明しています。それでも、学生は赤裸々なことを書いてきます。それは、他者の共感を得てみたいという気持ちもあると思いますが、それよりも、自分の生きてきた／生きていることに対して、なんらかの意味づけをしてみたい、その意味や価値をあらためて実感・表現してみたい、そして新たな自分を発見してみたいという気持ちがけっこう強くあると、私は感じます。本学の1年生には、大学入学を機に自分を変えたい、新たな自分になりたいという気持ちが結構強くあると、私は感じます。そのため、過去のことを書くことに抵抗が少なく、むしろ積極的に書こうとするのではないのでしょうか。

ただ、もちろん、クラスの雰囲気作りは大切です。書いて発表しやすい雰囲気を作ろうと、私も学生と同じペースでエッセーを書き、発表します。恥ずかしい自分や悩んでいた

自分、ときに人生のちょっとしたサクセスストーリーまで。自分に纏わるあらゆることを表現し、学生とともにその作品と一緒にあって批評します。また、過去の受講生、学生にとっては先輩が書いたエッセーに触れることも、内面を言語化することへの学生の抵抗感を弱めるはずです。先輩といっても歳が近いので、現在の受講生も先輩と似たような経験をしてきています。すると、先輩が書いていることについて、自分も書いてみようという気持ちにつながるでしょう。

第4クールにピアレビューを始めると、どの学生も熱心に推敲し批評します。自分の経験を書く文章だから、クラスメートが何を書いているのか、学生はすごく興味を持っています。つまり、もともと共感が生まれやすい環境はあるわけです。

ピアレビューをうまく行うポイントを整理すれば、二つです。一つは、タイミングを見計らうこと。もう一つは、学生に相談することです。

横山

「身体知」の授業では、自己とのコンフリクトはよく起こります。自己表現活動に興味を持つ学生、表現したいという欲求を潜在的にでも抱いている学生は、今までうまく自己を表現できなかったという過去を背負っていることが多いような気がします。それは、発表を聞いたり活動に取り組む様子を見たりすれば、わかります。

2013年度の「身体知」の授業で、とても繊細な詩を書く学生がいました。ファシリテーターとして良くなかったかもしれませんが、私は授業中、その学生に「あなたは生きづらくないですか」と尋ねたことがあります。するとその学生は大声で泣き出し、こういいました。「私は生きていけるでしょうか」と。その後、周りの学生がその学生を精神的に支えてくれました。これは極端な例ですが、確かにコンフリクトの解消は難しい問題です。だから、本学で「身体知」教育に取り組みを始めた当初は、臨床心理学の研究者に活動を観察し、アドバイスをしてもらっていました。

生きづらさを感じている若い学生は実はたくさんいるような気がします。彼らは自分の気持ちを表現する場を探しているのですから、パーソナル・ライティングに内面が赤裸々に表れるのは当然でしょう。従来の自己表現では、捉えきれない感情を抱く学生は少なくないと思います。書かずにはいられない感情を、ただ自分のためだけに書く。そのための方法がパーソナル・ライティングだと、私は考えています。

自分の内面をどのように吐露できるか、そのスキルはアカデミック・スキルではなく、サバイバル・スキルになっていくでしょう。学生が内面に秘めた気持ちに対して教員が意識的になることは、特に初年次の場合とても大切だと考えています。

岩井

残り時間が少なくなってきましたから、最後に私から質問させてください。

人間の価値観はさまざまです。ただ、一人ひとりが自分の価値観だけを絶対視し、これに反する他者を拒絶しては集団が成り立ちません。自分とは異なる価値観を有する他者を認め、尊重し、折り合いをつける必要があります。その重要性を、大学において学生自身が自覚できるようにすることは、初年次教育の大きな役割だと、私は考えています。教員には、学生の多様性をコントロールしながら、多様性の持つ力をうまく引き出していくことが求められるのではないのでしょうか。これは、本日の三人の先生方が実践されているような、初年次教育の先進的な取り組みにおいて実を結んでいると思います。「自分にそん

な取り組みができるのだろうか」と不安に感じる方が、本日の会場にあるいはいらっしゃるかもしれませんが、希有な才能を持つ一部の教員だけが実践できる特別なことではないと、私は考えています。学生の多様性をうまくコントロールするスキルは、誰とも共有しうるはずです。このことについての示唆を、パネリストの三人の先生方にいただければと思います。

銅金

先ほど発表でも申しましたが、ありふれた少数の材料を用いた単純な行為の反復に学生全員で取り組むことが重要だと、私は考えています。ファシリテーターを務めるには、学生一人ひとりの個性がよく見えるはずですから、どの学生をどのように支援するかを考えるヒントにもなるでしょう。

横山

学生は、精神的に脆いところがあるような気がします。自信があるように見えるけれど、その自信は根拠に裏打ちされていないことが多く、したがってすぐに崩れてしまう。そのためにも、成功体験を持たせる必要があるでしょう。「うまくいった」「やればできる」という気持ちを多く抱かせるわけです。ただ、大きな成功体験を得させようと難しい課題を与えて、成し遂げられない学生が増えてしまっては仕方ありません。どの学生も達成できるように、取り組みやすい活動をたくさん用意して、小さな成功体験を積み重ねることが重要だと考えます。なるべく多くの視点で学生を見取れるように、チーム・ティーチングを行うことも重要な鍵となるでしょう。

また、当たり前のことですが、まずは取り組みを始めることが大切です。事前に内容をしっかり検討することは不可欠ですが、実践したからこそ見えてくる課題もあります。ただ考えているだけでなく、動きながら考えるのです。本学の「身体知」プロジェクトの場合も、そうでした。今でも試行錯誤を繰り返しています。勇気を持って第一歩を踏み出してください。

谷

私は、前任校である京都精華大学での自分自身の授業経験から、そして3年前に京都造形芸術大学のマンデープロジェクトに講師として参加して、ファシリテーションの仕方を学んだと感じています。偶然に二つの大学とも、芸術系の大学だからということもあると思いますが、「先生になるな！あくまで私たちはファシリテーターである。」ということをお教わった気がします。今、パーソナル・ライティングの授業をするときも、自分が何をすべきなのか、学生から学ぼうと常に意識しています。もちろん、いつも上手くいくとは限りませんが、学生の心に耳を傾ける、すると、学生たちが私たちに「教えてくれる」と私は信じています。

岩井

ここで時間となってしまいました。これまでの話を簡単にまとめるのは難しいのですが、ポイントの一つは、学問はアートであるということでしょう。また、学生の達成感をいかに作るかも、重要な論点だったと思います。

学生は教員の姿を写す鏡だと、私は考えています。学生を変えるためには、まず教員が変わる必要があるはずです。先生方が自分を変えようとするときに、この大会企画フォーラムが少しでもお役に立てれば幸いです。

長時間ありがとうございました。